

峠を越えたフッサール・データベース：  
インターネット時代のマルチリンガル・テキストの  
ために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜渦, 辰二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00006871">https://doi.org/10.14945/00006871</a>

# 峠を越えたフッサール・データベース

——インターネット時代のマルチリンガル・テキストのために——

浜 渦 辰 二

## はじめに

インターネットに何時間も費やして、ゴミの山からいったい何が見つけれ  
る？——これは、クリフォード・ストールが『インターネットはからっぽの洞  
窟』<sup>(1)</sup>において提起した問いである。彼は、もともと木星の研究や宇宙望遠鏡の  
設計に携わる天文学者だが、インターネットで暗躍していたハイテクスパイ団  
(いわゆる「ハッカー」——この語は誤って用いられてきたが)をコンピュー  
タネットワーク上で追い詰め捕まえた事件について自ら記した『カッコウはコ  
ンピュータに卵を産む』<sup>(2)</sup>は世界的なベストセラーになった。そういう経歴をも  
つ彼が、インターネットの裏も表も知り尽くした者として、いま世界中に広が  
るインターネットの熱狂的な流行に冷水を浴びせたのが、前述の彼の新著であ  
る。このなかでストールは、インターネットとコンピュータに寄せられた過大  
な期待にさまざまな点から異議を申し立てている。例えば、曰く——「コン  
ピュータだから正しい」というのは、恐るべき誤解でしかない。／「パソコンで  
何でもできる」のではなく、「パソコンでできることしかできない」。／ネット世  
界は、自己主張するばかりで他人の意見に耳を貸さない輩の巣窟である。／オ  
イライン図書館は読書の愉しみを奪うばかりか、文化の基盤をも破壊する。／  
等々。——しかし、冒頭の引用も含め、いずれの異議も私には、言わずもがな  
のことか、あるいは、何かよく分からないけど何かすばらしいことがありそ  
うだという未知のものに寄せられた過剰な期待に対する挑発的な反応に過ぎない  
ように思われる。

どんなことにもプラス面もあればマイナス面もある。プラス面ばかりを見て、  
幻想をふりまくのは困りものだが、マイナス面ばかりことさらあら捜しても  
実りは少ない。誇大広告が世間に喧伝されているなかでは、確かにこうした冷

水を浴びせることも、「ちょっと待つて」と人々を立ち止まらせ、インターネットとはわれわれにとって何なんだろうかと、と冷静に考えさせる効果はあるだろう。しかし、それによって、「産湯とともに赤子を流す」ということになっては、新しい芽を摘むことにしかならないだろう。マイナス面ばかり強調して、伸びようとしているものをつぶすことよりも、マイナス面を絶えず見据えつつも、プラス面をどう生かし、活用して、伸ばしていくことができるか、そちらにこそエネルギーを使うべきではなかろうか。なるほどストーンは、「インターネットをたんに批判しているのではなく、真の意味での社会基盤（インフラストラクチャ）として存続してもらいたいと心底願っている」（同書訳者あとがき）らしいことは、同書からも窺える。同書終章で彼は、コンピュータネットワークが「何かに近づく自由」を提供してくれるとしても、「何かから遠ざかる自由」があってもいいのではないかと主張する一方で、だからと言って、「その自由があったとしても、コンピュータを処分したり、キーボードに背中を向けたりする人はたいしていないだろう。ネットワークは便利だし、モデム経由で利用できる資源は山ほどあるから」（同書 393 頁）と、自らインターネットを棄てるつもりはないし、その価値を認めているのである。

しかし、そうであるなら、私には、やや期待を煽る部分を差し引いたうえでなお、インターネットの可能性を紹介して見せた立花隆の『インターネット探検』<sup>(3)</sup>が言う「インターネットはどこでもドア」というキャッチフレーズの方が、ほほえましくもあり、私たちを前向きにさせてくれるように思われるのである。『宇宙からの帰還』『田中角栄研究』『日本共産党の研究』『脳死論』『サル学の現在』などで、自ら足を使い人をも使って集めた膨大な情報に基づいて執筆した経験のある立花隆だからこそ、インターネットがもたらした「情報革命」を過不足なく評価しつつ、述べている。「人類社会がかつて経験したことがないほど大量の情報が人々の間でやりとりされるようになった。それは同時に、それだけ大量の情報がそれだけ沢山の人の間で共有されることになったということでもある。それがこれからの人類社会にどんなインパクトをもたらすのか。ここが興味深い。」（同書 167 頁以下）と。ここで、インターネットは、情報の公開を促進し、情報についての民主主義をもたらすものとして評価されているのである<sup>(4)</sup>。

いま必要なことは、インターネットに過大な期待を寄せることでも、その意義を過少に見積もることでもなく、実際にインターネットによって何ができるのかを具体的に示し、積極的な可能性を示していくことであろう。「パソコンで

何でもできる」のではなく、「パソコンでできることしかできない」のとまったく同様に、「インターネットで何でもできる」のではなく、「インターネットでできることしかできない」ということは、言うまでもない。パソコンに過大な期待をしてはならないように、インターネットにも過大な期待をしてはならないが、パソコンやインターネットで可能になることについては冷静に評価し、それを積極的に伸ばしていく、しかも、それを具体的なカタチで示していく、これがいま必要なことであろう。いま、私が従事している哲学の分野においても、さまざまな仕方でインターネットが活用され、膨大な情報が蓄積されインターネットを通じて利用可能になってきている<sup>(5)</sup>。そういう状況のなかで、私たちが取り組み始めて三年になり、昨年度の作業の完成をもって目標の半分を達成し、いわば山越えの峠を越えた感のあるフッサール・データベース (<http://www.ipcs.shizuoka.ac.jp/~jsshama/HUA-home.html>) は、インターネットを哲学研究のために活用していく試みの一つと見なされていていい、と私は考えている。

## 1. 峠を越えたフッサール・データベース

フッサール・データベースの内容、これまでの経過などについて詳しくは、旧稿<sup>(6)</sup>を参照していただきたいが、そこで既に述べてきたように、このデータベースは、著作権の問題があるためテキストそのものを公開することはできず、その代わりに、私たち共同研究者が厳選した466語(句)の出現箇所を『フッサール全集』の頁数と行数で表示するという、検索結果のデータベースである。それは、初めやむを得ない二次的な逃げ道として案出したものであったが、それがインターネットを通じて公開されるということによって、「情報についての民主主義」という積極的な意味を持つようになったのではないかと、いまは考えている。もちろん、或る語句の出現箇所が一目瞭然と分かるということは、それだけで何か哲学的な意義を持つものではなく、それは、単なるデータ(情報)に過ぎない。それを単なるバラバラの無意味な所与ではなく、意味のある情報(information)としてカタチを与える(in-form)ことができるのは、私たちがそれをどう読むのかという読みである。しかし、少なくとも、そのための材料(material)を誰もが共有できるということを実現したのは、インターネットによる公開であった。

私たちがこの作業を始めたのは、3年前の1994年のことであったが、1994年

度に5巻分(11、13~15、16巻)を完成し1995年4月インターネットで公開したのを皮切りに1996年4月には6巻分(21~23、25、27、29巻)のデータを追加し、そして更に、今回1997年4月にも6巻分(1~5、10巻)のデータを追加することになった。今回追加した6巻の底本は以下の通りである。

Bd. I *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, hrsg. von S. Strasser, 1963 (2. Auflage). [『デカルト的省察とパリ講演』]

Bd. II *Die Idee der Phänomenologie. Fünf Vorlesungen*, hrsg. von W. Biemel, 1973 (2. Auflage). [『現象学の理念』]

Bd. III/1 *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch*, hrsg. von K. Schuhmann, 1976 (neu hrsg.). [『イデーン第I巻』]

Bd. IV *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch*, hrsg. von M. Biemel, 1952. [『イデーン第II巻』]

Bd. V *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Drittes Buch*, hrsg. von M. Biemel, 1952. [『イデーン第III巻』]

Bd. X *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins (1893-1917)*, hrsg. von R. Boehm, 1966. [『内的時間意識の現象学』]

これらは、『フッサール全集』でも、初めの方の巻を占めるものであり、また、わが国でも邦訳が早い時期になされた巻でもあり、それゆえフッサールの代表的著作と見なされてきたものである。それだけに、これらの巻が今回フッサール・データベースに加わったことは大きな意味を持っており、利用者の期待にも答えるものである。と同時に、これら今回の6つの巻のデータの完成によって、私たちのフッサール・データベースも合計で『フッサール全集』の17巻をカバーすることになり、それは、現在30巻まで刊行されている同『全集』の半分以上を覆うことになった。その意味で、同『全集』はまだまだこれからの刊行が予定されているものがあるとはいえ、とりあえず、「峠は越した」と言うことができよう<sup>(7)</sup>

ここで、今回作業の完成した巻について、詳しくはインターネットを通じてフッサール・データベースにアクセスしていただくとしても、入力されたテキストのサンプルと、検索結果のサンプルをわずかなりとも呈示しておこう。

① まず、検索作業のもとになるテキストは次のようなものである。サンプル

として、『フッサール全集』第1巻すなわち『デカルト的省察とパリ講演』の最初のページを挙げておこう。テキストのなかに見られる“\_P”, “\_T”, “\_!” , “\_#” は、検索ソフトのための制御記号で、それぞれ、ページ数、タイトル行、イタリックおよびゲシュベルトによる強調、ギリシア語（ここにはないが）を表示するためのものである。また、ドイツ語に特有な記号(ウムラウトやエスツェット)はそれぞれ“a~”, “o~”, “u~”, “s~” によって、また、フランス語に特有な記号、例えばここに登場する“e” は“e/” によって置き換えられている。

\_P1

\_T---A---

\_TDIE PARISER VORTRA ~GE

\_P3

An dieser ehrwu~rdigsten Sta~tte franzo~sischer Wissenschaft  
u~ber die neue Pha~nomenologie sprechen zu du~rfen, erfu~llt mich  
aus besonderen Gru~nden mit Freudigkeit. Denn kein Philosoph  
der Vergangenheit hat auf den Sinn der Pha~nomenologie so  
entscheidend gewirkt wie Frankreichs gro~s~ter Denker, Rene/  
Descartes. Ihn mus~sie als ihren eigentlichen Erzvater verehren.  
Ganz direkt, ausdru~cklich sei es gesagt, hat das Studium der  
Cartesianischen Meditationen in die Neugestaltung der werden-  
den Pha~nomenologie eingegriffen und ihr diejenige Sinnesform  
gegeben, die sie jetzt hat und die es fast gestattet, sie einen  
neuen Cartesianismus zu nennen, einen Cartesianismus vom 20.  
Jahrhundert.

Bei dieser Sachlage darf ich wohl im voraus Ihres Anteils  
sicher sein, wenn ich an diejenigen Motive der \_!Meditationes de  
\_!prima philosophia! anknu~pfe, denen, wie ich glaube, eine Ewig-  
keitsbedeutung zukommt, und wenn ich daran anschlies~end die  
Umbildung und Neubildung kennzeichne, in welcher das Eigen-  
tu~mliche der pha~nomenologischen Methode und Problematik  
entspringt.

Jeder Anfa~nger der Philosophie kennt den merkwu~rdigen

Gedankenzug der Meditationen. Ihr Ziel ist, wie wir uns erinnern, eine vo ~ llige Reform der Philosophie, darin beschlossen die aller Wissenschaften. Denn sie sind nur unselbsta ~ ndige Glieder der einen universalen Wissenschaft, der Philosophie. Nur in ihrer systematischen Einheit ko ~ nnen sie zu echter Rationalita ~ t gebracht werden --- die ihnen, so wie sie bisher erwachsen sind, fehlt. Es bedarf eines radikalen Neubaues, der der Idee der Philosophie als \_!universaler Einheit der Wissen-  
\_!schaften! in der Einheit einer \_!absolut rationalen  
\_!Begrü ~ ndung genugtu !. Diese Forderung des Neubaues wirkt sich bei Descartes in einer subjektiv gewendeten Philosophie aus. Diese subjektive Wendung vollzieht sich in zwei Stufen.

② 次に、前述の 466 語（句）について同じ巻の 1 巻分の出現回数のみを表した検索結果のリストから、その一部を示しておこう。編者序論および脚注についても検索できるよう、本文と脚注と編者序論とを別々のデータベースとして作成している（例えば、HUA\_01 T は第 1 巻の本文、HUA\_01 A はその脚注、HUA\_01 E は同巻の編者序論をそれぞれ表す）が、ここでは、サンプルとして、本文の“a”で始まる検索語のみを示す。以下のリストのうち、“#”のあとの数字はナンバリングされた集合番号、次の数字はその検索語のこの巻における出現回数、検索語の前の“\_”は大文字・小文字を区別せずに拾う機能、検索語の後の“\*”は前方一致で拾う機能（例えば、“\_abbild\*”は、“Abbild”, “Abbildung”, “abbildet”, etc. をすべて拾う）をそれぞれ表している。

《HUA\_01 T.IDX》

- # 1 : 18 : \_a priori
- # 2 : 1 : \_abbild\*
- # 3 : 0 : \_abschattung\*
- # 4 : 90 : \_absolut\*
- # 5 : 12 : \_abstraktion\*
- # 6 : 14 : \_abwandlung\*
- # 7 : 10 : \_ada ~ quat\*

- # 8 : 4 : \_a ~ hnlichkeit\*
- # 9 : 80 : \_akt\*
- # 10 : 27 : \_aktiv\*
- # 11 : 17 : \_aktuell\*
- # 12 : 2 : \_als-ob
- # 13 : 19 : \_alter ego
- # 14 : 46 : \_an sich
- # 15 : 7 : \_analogon\*

# 16 : 32 : \_analyse\*  
 # 17 : 29 : \_anderer\*  
 # 18 : 5 : \_anonym\*  
 # 19 : 0 : \_anormal\*  
 # 20 : 0 : \_anormalita ~ t\*  
 # 21 : 16 : \_anschauung\*  
 # 22 : 3 : \_anthropolog\*  
 # 23 : 4 : \_antizipation\*  
 # 24 : 0 : \_anzeichen  
 # 25 : 3 : \_anzeige\*  
 # 26 : 73 : \_apodiktisch\*  
 # 27 : 13 : \_apodiktizita ~ t\*  
 # 28 : 1 : \_apparenz\*  
 # 29 : 24 : \_apperzeption\*  
 # 30 : 3 : \_apperzeptiv\*  
 # 31 : 12 : \_apperzipier\*  
 # 32 : 19 : \_appra ~ sentation\*  
 # 33 : 9 : \_appra ~ sentativ\*

# 34 : 28 : \_appra ~ sentier\*  
 # 35 : 0 : \_apprehension\*  
 # 36 : 37 : \_apriori  
 # 37 : 0 : \_arithmetik  
 # 38 : 3 : \_aspekt\*  
 # 39 : 0 : \_assertorisch\*  
 # 40 : 26 : \_assoziation\*  
 # 41 : 11 : \_assoziativ\*  
 # 42 : 4 : \_auffassung\*  
 # 43 : 3 : \_aufmerksamkeit\*  
 # 44 : 0 : \_usdehnung\*  
 # 45 : 11 : \_ausdruck\*  
 # 46 : 9 : \_aussage\*  
 # 47 : 5 : \_ausschalt\*  
 # 48 : 4 : \_ausschaltung\*  
 # 49 : 1 : \_aus ~ enhorizont  
 # 50 : 0 : \_axiologie

~~~~~  
 (以下略)  
 ~~~~~

③ 続いて、今回作業を行った6つの巻について、サンプル語 (“\_horizont\*”) の各巻 (ただし本文のみ) における出現箇所を頁数と行数とで表した検索結果を示しておこう。“#”のあとの数字は、検索語につけられたナンバリングの数字、次の“items”の前の数字がこの巻における出現回数、その下に並ぶ5桁の数字のうち、前3桁は頁数を、後2桁は行数をそれぞれ表す。ただし、出現回数が1以上10未満の場合は、タイトルなしの表示方式、出現回数が10以上の場合は、タイトル付きの表示方式をとっている。

<HUA\_01T>

#174:S: 71 items            \_horizont\*

---A---



DIE PARISER VORTRA ~ GE

01838 01901 01912 01927 01935 02035 02106 02107 02132  
02223 02339 02410 03325 03630 03639 03727

---B---

CARTESIANISCHE MEDITATIONEN

EINLEITUNG

I. MEDITATION 05308 06216 06216 06223 06229

II. MEDITATION 06729 06909 08115 08205 08206 08214 08225 08231  
08233 08239 08301 08309 08313 08319 08526 08604  
08714 08812 08836 09104 09105

III. MEDITATION 09535 09629 09838 09902

IV. MEDITATION 09922 10003 10226 10502 10717 10720 11814

V. MEDITATION 13205 13215 13313 14106 14403 15838 15839 16034  
16036 16727 17520 17605 17721

SCHLUSS 17919 17927 18017

---C---

INHALTSU ~ BERSICHT

19036 19110

<HUA\_02T>

# 174: 0 : \_horizont\*

<HUA\_03T>

#174:S: 30 items \_horizont\*

EINLEITUNG 00510 00513 00536

ERSTES BUCH

ERSTER ABSCHNITT

ERSTES KAPITEL

ZWEITES KAPITEL

ZWEITER ABSCHNITT

ERSTES KAPITEL 05722 05735 05801 05929 06005

ZWEITES KAPITEL 09120 09211

DRITTES KAPITEL 10130 10131 10212  
 VIERTES KAPITEL  
 DRITTER ABSCHNITT  
 ERSTES KAPITEL 13605 14721  
 ZWEITES KAPITEL 18402 18405 18412 18413 18434 18438 18503 18504  
 18530 18531 18535 18537

DRITTES KAPITEL  
 VIERTES KAPITEL 27301  
 VIERTER ABSCHNITT  
 ERSTES KAPITEL  
 ZWEITES KAPITEL 32634 32731  
 DRITTES KAPITEL

<HUA\_04T>

#174:S: 27 items \_horizont\*

ZWEITES BUCH  
 ERSTER ABSCHNITT  
 ERSTES KAPITEL 01012 02106  
 ZWEITES KAPITEL 03934  
 DRITTES KAPITEL 06801  
 ZWEITER ABSCHNITT  
 EINLEITUNG  
 ERSTES KAPITEL 10720 10723  
 ZWEITES KAPITEL  
 DRITTES KAPITEL  
 VIERTES KAPITEL  
 DRITTER ABSCHNITT  
 ERSTES KAPITEL 19505 19621 19907  
 ZWEITES KAPITEL 21836 25730 25731 27032 27523  
 DRITTES KAPITEL 30014 30022  
 BEILAGEN  
 BEILAGE I

BEILAGE II  
 BEILAGE III  
 BEILAGE IV  
 BEILAGE V  
 BEILAGE VI  
 BEILAGE VII  
 BEILAGE VIII  
 BEILAGE IX  
 BEILAGE X  
 BEILAGE XI  
 BEILAGE XII                    35002 37136 37217 37219  
 BEILAGE XIII                   37503  
 BEILAGE XIV                    37941 38002 38012 38034 38311 38523

<HUA\_05T>

#174:S:    1 items            \_horizont\*  
 05603

<HUA\_10T>

#174:S:    8 items            \_horizont\*  
 04318 05314 05315 05315 05317 08420 10814 11423

ここでももちろん、この語「地平 (Horizont)」(および、その関連語) の出現箇所が、第1巻は71箇所、第2巻は0箇所、第3巻は30箇所、第4巻は27箇所、第5巻は1箇所、第10巻は8箇所、というこの結果は、「地平の現象学」の成立事情を考えるにあたって興味深いことであるが、ここではこのテーマそのものに立ち入ることはできない<sup>(8)</sup>

## 2. 新しい事態

さて、ここまでは、1昨年度の作業と同じ作業を新しい6つの巻に対して行ったというだけのことであった。ところが、昨年度の作業には、それ以前にはなかった新しい作業が加わった。それは、あくまで事のついでに副産物として行

われたものであるが、それがこれから持ってくる意味は大きいと思われるので、ここで特に取り上げて紹介したい。

それは、私たちが検索のために作成しているテキスト (TEXAS ファイルと呼んでおく)<sup>①</sup>と並んで、インターネットの WWW (World Wide Web) ですっかり有名になった HTML (Hypertext Markup Language) を使ったテキスト (HTML ファイルと呼んでおく) を作成していったことである。すなわち、私たちが検索のために作成している TEXAS ファイルは、先にそのサンプルを示しておいたように、“\_P”、“\_T”、“\_!”、“\_#”といった制御記号によって、それぞれページ数、タイトル行、イタリックおよびゲシュペルトによる強調 (正確に言えば、イタリックとゲシュペルトの違いを私たちは無視した)、ギリシア語を表し、また、“a~”、“o~”、“u~”、“s~”さらに“e/”、“e¥”、“e^”、“c~”などによって、それぞれドイツ語やフランス語に特有な記号を表している。実際、私たちが検索に使っているソフトの上では、この表記を使えば独仏文字も正しく表示させることができる。しかし、これらの制御記号・特殊記号はこのソフトのためのものであり、汎用性のあるものではない!<sup>②</sup>

ところが、インターネットの WWW で使われている HTML のタグ (表示のための制御記号) を付けられたテキストは、WWW ブラウザ (例えば、Netscape や Internet Explorer) で読めば、独仏文字およびその他の特殊記号を簡単に表示させることができる。しかも、この HTML で書かれたテキストは、MS-DOS の標準テキスト (ASCII ファイル) であり、従って、今では 98、Mac、DOS/V (IBM-PC)、UNIX という機種 (あるいは、OS) の違いに依存することのない汎用性を持っている。この HTML ファイルがどのようなものであるか、見ていただく。ここでも、サンプルとして、先にも使ったのと同じ『フッサー全集』第 1 巻すなわち『デカルト的省察とパリ講演』の同じページを使うことにしよう。

① まず、この頁を HTML のテキストで示すと次のようになる (ただし、“\_P 1”といった頁数の表記は、TEXAS のためのものである。また、原文でゲシュペルト (隔字体) になっている箇所は、HTML にはゲシュペルトの概念がないし、検索の際に厄介なので、ボールドで表示することにした。く > で挟まれたタグの意味については、書店に氾濫している HTML の解説書<sup>③</sup>を参照されたい)。

<BR>

\_P1<BR>

<H1>DIE PARISER VORTR&Auml;GE</H1><BR>

<BR>

\_P3<BR>

An dieser ehrw&uuml;rdishten St&auml;tte franz&ouml;sischer Wissenschaft <BR>&uuml;ber die neue Ph&auml;nomenologie sprechen zu d&uuml;rfen, erf&uuml;hlt mich <BR>aus besonderen Gr&uuml;nden mit Freudigkeit. Denn kein Philosoph <BR>der Vergangenheit hat auf den Sinn der Ph&auml;nomenologie so <BR>entscheidend gewirkt wie Frankreichs gr&ouml;&szlig;ter Denker, Rene <BR>Descartes. Ihn mu&szlig; sie als ihren eigentlichen Erzvater verehren. <BR>Ganz direkt, ausdr&uuml;cklich sei es gesagt, hat das Studium der <BR>Cartesianischen Meditationen in die Neugestaltung der werden-<BR>den Ph&auml;nomenologie eingegriffen und ihr diejenige Sinnesform <BR>gegeben, die sie jetzt hat und die es fast gestattet, sie einen <BR>neuen Cartesianismus zu nennen, einen Cartesianismus vom 20. <BR>Jahrhundert.<BR>

Bei dieser Sachlage darf ich wohl im voraus Ihres Anteils <BR>sicher sein, wenn ich an diejenigen Motive der <I>Meditationes de <BR>prima philosophia</I> ankn&uuml;pfe, denen, wie ich glaube, eine Ewig-<BR>keitsbedeutung zukommt, und wenn ich daran anschlie&szlig;end die <BR>Umbildung und Neubildung kennzeichne, in welcher das Eigen-<BR>t&uuml;mliche der ph&auml;nomenologischen Methode und Problematik <BR>entspringt.<BR>

Jeder Anf&auml;nger der Philosophie kennt den merkw&uuml;rdigen <BR>Gedankenzug der Meditationen. Ihr Ziel ist, wie wir uns erinnern, <BR>eine v&ouml;llige Reform der Philosophie, darin beschlossen die aller <BR>Wissenschaften. Denn sie sind nur unselbst&auml;ndige Glieder der <BR>einen universalen Wissenschaft, der Philosophie. Nur in ihrer <BR>systematischen Einheit k&ouml;nnen sie zu echter Rationalit&auml;t ge-<BR>bracht werden --- die ihnen, so wie sie bisher erwachsen sind, <BR>fehlt. Es bedarf eines radikalen Neubaus, der der Idee der Philo-<BR>sophie als <B>universaler Einheit der Wissen-<BR>

schaften in der Einheit einer absolut rationalen Begründung genügt. Diese Forderung des Neubaues wirkt sich bei Descartes in einer subjektiv gewendeten Philosophie aus. Diese subjektive Wendung vollzieht sich in zwei Stufen.

② この HTML ファイルを WWW ブラウザで読むと、つぎのように原文が再現される。

## A DIE PARISER VORTRÄGE

\_P3

An dieser ehrwürdigsten Stätte französischer Wissenschaft über die neue Phänomenologie sprechen zu dürfen, erfüllt mich aus besonderen Gründen mit Freude. Denn kein Philosoph der Vergangenheit hat auf den Sinn der Phänomenologie so entscheidend gewirkt wie Frankreichs größter Denker, René Descartes. Ihn muß sie als ihren eigentlichen Erzvater verehren. Ganz direkt, ausdrücklich sei es gesagt, hat das Studium der Cartesianischen Meditationen in die Neugestaltung der werden-Phänomenologie eingegriffen und ihr diejenige Sinnesform gegeben, die sie jetzt hat und die es fast gestattet, sie einen neuen Cartesianismus zu nennen, einen Cartesianismus vom 20. Jahrhundert.

Bei dieser Sachlage darf ich wohl im voraus Ihres Anteils sicher sein, wenn ich an diejenigen Motive der *Meditationes de prima philosophia* anknüpfe, denen, wie ich glaube, eine Ewigkeitsbedeutung zukommt, und wenn ich daran anschließend die Umbildung und Neubildung kennzeichne, in welcher das Eigentümliche der phänomenologischen Methode und Problematik entspringt.

Jeder Anfänger der Philosophie kennt den merkwürdigen Gedankenzug der Meditationen. Ihr Ziel ist, wie wir uns erinnern, eine völlige Reform der Philosophie, darin beschlossen die aller Wissenschaften. Denn sie sind nur unselbständige Glieder der einen universalen Wissenschaft, der Philosophie. Nur in ihrer systematischen Einheit können sie zu echter Rationalität gebracht werden — die ihnen, so wie sie bisher erwachsen sind, fehlt. Es bedarf eines radikalen Neubaues, der der Idee der Philosophie als **universalen Einheit der Wissenschaften in der Einheit einer absolut rationalen Begründung genügt**. Diese Forderung des Neubaues wirkt sich bei Descartes in einer subjektiv gewendeten Philosophie aus. Diese subjektive Wendung vollzieht sich in zwei Stufen.

これだけ普及してきたインターネットの状況を考えると、今後、電子テキストは、この HTML が標準になっていくと思われる(少なくとも英語以外の言語のテキストには、それが有効である)<sup>(12)</sup>。また、先に示した TEXAS ファイルとこの HTML ファイルとを比べていただければ分かるように、前者のテキストから後者のテキストへは(イタリックとゲシュペルトについては別にして)或る程度容易に機械的な一括変換が可能である。これらが、私たちが昨年度、副産物としてこの HTML テキストを作成してみた理由である。

現在、インターネット上には、このような HTML を使って書かれた電子テキストが、哲学の分野においてもすでに多数公開されている<sup>(13)</sup>ただし、著作権・版權の問題があり、どのようなテキストでも公開できるという状況にあるわけではない。私たちが作成しているフッサールのテキストの底本である『フッサール全集』も、オランダの出版社(今は、Kluwer Academic Publishers)が版權をもっており、私たちのテキストがどのようなかたちで公開できるかについて、現在も同社と交渉を重ねているところである。

### 3. 98、Mac、DOS/V 共存環境のなかでのマルチリンガル・テキスト

さて、以上のように、私たちの検索を中心としたフッサール・データベース作成の副産物として、さしあたり今回作業を行った『フッサール全集』の第1～5、および10巻について、このような HTML テキストを作成してきたわけだが、その作業をする際に、これまたもう一つの副産物として、98、Mac、DOS/V という三つの異なる機種環境の間でのコンバートについて、いくつか学ぶことができたので、これについてもここで併せて報告し、後進の研究者たちの参考にしていただきたい<sup>(14)</sup>

異機種環境の間でのコンバートとは言っても、MS-DOS 標準テキストファイルについては、フロッピーの違い(2 DD か 2 HD か、2 HD でも 1.25 MB か 1.44 MB かという違い)こそあれ、スリーモードのフロッピーディスクドライブなどによってそれをクリアすれば何の問題もない。現在では、ほとんどのワープロ専用機でさえ、MS-DOS 標準テキストファイルを扱うことができるようになっていたので、パソコンの異機種間のみならず、ワープロ専用機とパソコンの間での互換ですら難なく可能となっている。ところが問題は、私たちのテキストには不可欠の独仏文字およびその他ギリシア語などの特殊記号である。これらは MS-DOS 標準テキストとして使える記号には属していない。した

がって、或る機種ではうまく表示された独仏文字も、別の機種のワープロ・パソコンで読もうとすると文字化けしてしまう。これらの特殊文字は異機種間で互換性がないのである。なぜだろうか。それを説明するには、まず、文字コードのことから話を始めなければならないが、その原因が分かりさえすれば異機種間で互換性を確保することも可能になるのである。

さて、コンピュータの内部では、文字はすべて0と1の2進法の数字に置き換えて処理されていることはご存知だろう。したがって、アルファベットおよびその他の記号には、それぞれに対応する数値が定められていて、これが文字コードと呼ばれるものである。「もともと英語圏で発達を遂げたコンピュータの文字処理に必要なだったのは、アルファベット26文字といくつかの記号だけであった。それを機械で処理するには、1桁の2進数を基準として計算するコンピュータに7ビット、つまり2の7乗で128のコードを設けて、そこに文字を割りふるだけでも十分にことが足りた。そこで各メーカー間で互換性が保てるようにASCII (American Standard Code of Information Interchange) コードと呼ばれるコードが制定され、その後1ビット拡張されて8ビットとなり、256文字が定義された。この文字コードは拡張ASCIIコードと呼ばれて、今日ほぼ世界的にあらゆるコンピュータの文字コードの基礎となっている」<sup>(5)</sup>初めのASCIIコードで、アルファベットの大文字、小文字、数字、制御記号など、基本的な記号が0から127までに割り振られ、これはすべての機種で共有されていた。ところが、後から追加された128から256までは、未定義部分として、各国語でそれぞれ必要な文字が割り当てられたが、ここで国によってばかりでなく、機種によって異なる文字を割り当てることになってしまった。これが問題の始まりである。

ここで、サンプルとして4種類の異なる文字コード表を見ていただく(次頁以下)<sup>(6)</sup>表1は、もともとIBM-PCで標準となっており、DOS/Vの英語モードの標準ともなっているコード・ページ437と呼ばれるものである。表2は、日本語JISのいわゆる「シフトJISコード表」とも呼ばれるもので、DOS/Vではコード・ページ932と呼ばれている。0~127のコードはASCIIとほぼ同様だが、128~256のコードは、半角カタカナに当てられた部分と、2バイトコードの前半となり、続く1バイトコードと組み合わせていわゆる全角文字(漢字、ひらがな、カタカナ、全角の特殊記号)を表すための部分とがある。表3は、Windowsで採用されたANSI (American National Standards Institute) character setsで、そして最後に、表4は、Macintoshで採用されているStan-



1		0	16	32	48	64	80	96	112	128	144	160	176	192	208	224	240
	2 <sup>A</sup> <sub>↓</sub> B	0-	1-	2-	3-	4-	5-	6-	7-	8-	9-	A-	B-	C-	D-	E-	F-
0	-0	▶		0	@	P	·	p	Ç	É	á	▤	┘	┘	α	≡	
1	-1	☺	◀	!	l	A	Q	a	q	ü	æ	í	▤	┘	≡	β	±
2	-2	☹	↑	"	2	B	R	b	r	é	Æ	ó	▤	┘	┘	Γ	≥
3	-3	♥	!!	#	3	C	S	c	s	â	ô	ú		┘	┘	π	≤
4	-4	♦	¶	\$	4	D	T	d	t	ä	ö	ñ	┘	┘	Σ	ƒ	
5	-5	♣	§	%	5	E	U	e	u	à	ò	Ñ	≡	+	≡	σ	J
6	-6	♠	—	&	6	F	V	f	v	á	ú	ª	┘	≡	≡	μ	+
7	-7	•	↑	'	7	G	W	g	w	ç	ù	º	┘	┘	┘	τ	≈
8	-8	■	†	(	8	H	X	h	x	ê	ÿ	¿	┘	┘	≡	Φ	°
9	-9	○	↓	)	9	I	Y	i	y	ë	Ö	ƒ	┘	┘	┘	⊙	•
10	-A	◎	→	*	:	J	Z	j	z	è	Û	┘	┘	┘	┘	Ω	•
11	-B	♂	←	+	;	K	[	k	{	ĩ	½	¼	┘	┘	■	δ	√
12	-C	♀	┘	.	<	L	\	l		î	£	¼	┘	┘	■	∞	n
13	-D	♪	↔	-	=	M	]	m	}	i	¥	ı	┘	┘	■	∅	2
14	-E	♫	▲	.	>	N	^	n	˜	Ä	Þ	«	≡	┘	┘	ε	■
15	-F	☼	▼	/	?	O	_	o	△	Å	ƒ	»	┘	┘	■	∩	

表1：PC-DOS用コード・ページ437

1		0	16	32	48	64	80	96	112	128	144	160	176	192	208	224	240
	2 <sup>A</sup> <sub>↓</sub> B	0-	1-	2-	3-	4-	5-	6-	7-	8-	9-	A-	B-	C-	D-	E-	F-
0	-0	┘		0	@	P	I	p									
1	-1	┘		!	A	Q	a	q									
2	-2	┘		"	B	R	b	r									
3	-3	┘		#	C	S	c	s									
4	-4	┘		\$	D	T	d	t									
5	-5	┘		%	E	U	e	u									
6	-6	≡		&	F	V	f	v									
7	-7	↓		'	G	W	g	w									
8	-8			(	H	X	h	x									
9	-9	○		)	I	Y	i	y									
10	-A			*	:	J	Z	j	z								
11	-B	☒		←	+	;	K	[	k	{							
12	-C			↑	.	<	L	¥	l								
13	-D				-	=	M	]	m	}							
14	-E	■		→	.	>	N	^	n	—							
15	-F	☼		←	/	?	O	_	o								

2バイト・コード文字の1バイト目

2バイト・コード文字の2バイト目

表2：PC-DOS用コード・ページ932

	00	10	20	30	40	50	60	70	80	90	A0	B0	C0	D0	E0	F0
00			SP	0	@	P	.	p			NBSP	°	À	Ð	à	ð
01			1	A	Q	a	q		'	ı	±	Á	Ñ	á	ñ	
02		"	2	B	R	b	r	,	'	¢	²	Â	Ò	â	ò	
03		#	3	C	S	c	s	f	"	£	³	Ã	Ó	ã	ó	
04		\$	4	D	T	d	t	"	"	¤	¼	Ä	Ô	ä	ô	
05		%	5	E	U	e	u	...	•	¥	½	Å	Õ	å	õ	
06		&	6	F	V	f	v	†	-	¦	¾	Æ	Ö	æ	ö	
07		'	7	G	W	g	w	‡	-	§	·	Ç	×	ç	+	
08		(	8	H	X	h	x	-	-	-	.	È	Ø	è	ø	
09		)	9	I	Y	i	y	‰	™	©	'	É	Ù	é	ù	
0A		*	:	J	Z	j	z	Š	š	•	•	Ê	Ú	ê	ú	
0B		+	;	K	[	k	{	(	)	«	»	Ë	Û	ë	û	
0C		,	<	L	\	l		œ	œ	¬	¼	ı	Ü	ı	ü	
0D		-	=	M	]	m	}			-	½	ı	Ý	ı	ý	
0E		.	>	N	^	n	~			®	¾	ı	Þ	ı	þ	
0F		/	?	O	_	o				ÿ	-	ı	ı	ß	ı	ÿ

表3 : Windows用コード・ページ ANSI Character Sets

	0x	1x	2x	3x	4x	5x	6x	7x	8x	9x	Ax	Bx	Cx	Dx	Ex	Fx
x0	NUL	DLE	SP	0	@	P	.	p	À	ä	†	∞	ı	-	‡	¶
x1	SOH	DC1	!	1	A	Q	a	q	Á	é	°	±	ı	—	·	Ò
x2	STX	DC2	"	2	B	R	b	r	Ç	ı	¢	≤	-	"	,	Û
x3	ETX	DC3	#	3	C	S	c	s	É	ı	£	≥	√	"	..	Ü
x4	EDT	DC4	\$	4	D	T	d	t	Ë	ı	§	¥	f	'	‰	Û
x5	END	NAK	%	5	E	U	e	u	Ö	ı	•	μ	=	'	Á	ı
x6	ACK	SYN	&	6	F	V	f	v	Û	ñ	¶	ð	Δ	+	È	·
x7	BEL	ETB	'	7	G	W	g	w	á	ó	ß	Σ	«	ó	Á	-
x8	BS	CAN	(	8	H	X	h	x	ä	ò	©	Π	»	y	È	-
x9	HT	EM	)	9	I	Y	i	y	á	ó	©	π	...	ÿ	È	-
xA	LF	SUB	*	:	J	Z	j	z	ä	ó	™	ı	NBSP	/	ı	·
xB	VT	ESC	+	;	K	[	k	{	ä	ó	'	•	Á	ı	ı	·
xC	FF	FS	,	<	L	\	l		ä	ú	-	°	Á	ı	ı	·
xD	CR	GS	-	=	M	]	m	}	ç	ù	≠	Ω	Ö	ı	ı	·
xE	SO	RS	.	>	N	^	n	~	é	ù	Æ	æ	œ	fi	Ó	·
xF	SI	US	/	?	O	_	o	DEL	è	ü	Ø	ø	œ	fi	Ó	·

表4 : Macintosh用コード・ページ Macintosh Character Sets: Roman

dard Roman character sets である。表 1・表 3・表 4 を比べれば、同じヨーロッパ系の文字を使いながらも、128～256 の箇所の割り振り方がそれぞれ微妙に異なることがお分かりであろう。これが異機種間の文字化けの原因なのである。そしてまた、これが原因だということが分かれば、これらの文字コードの間で変換の方式を作つてさえやれば、独仏文字その他の特殊文字についても互換性を確保することができるということになる。

ここで、異機種間の文字コードの変換に入る前に、より基本的な MS-DOS テキストファイルにおける変換（コンバート）一般について述べておこう。具体的に、私たちが今回行った TEXAS ファイルから HTML ファイルへの変換を考えてみよう。つまり、TEXAS ファイルでは、私たちのテキストで問題になるドイツ語特有の文字は、

ä: a~, ö: o~, ü: u~, ß: s~

そして、フランス語特有の文字は、

é: e/, è, â, û: e¥, a¥, u¥; ê, â, ô, û: e^, a^, o^, u^; ë, î, ü: e~, i~, u~; ç: c~

がそれぞれ当てられているが、HTML ファイルでは、

&auml;, &ouml;, &uuml;, &szlig;

&acute;, &grave;, &agrave;, &ugrave;, &ecirc;, &acirc;, &ocirc;, &ucirc;, &iuml;, &ccedil;

などとなる。これを、ワープロあるいはエディタで一つずつ一括置換してもできないことではないが、それでは手間がかかってしょうがない。そこで、これを一挙に置換してくれる、言わばコンバータ代わりの作業をしてくれるソフトがある。それは、もともと UNIX で開発されたものが DOS にも移植されている SED という、テキストの加工を目的としたツールである。SED の基本的な機能は、文字列を検索して、それを置き換えることにあり、それは、テキストを確認しながらではなく、ファイル全体に対してコマンドによって一挙に操作するため、非対話型のエディタと呼ばれる<sup>1)</sup>これを使って、例えば、

```
sed -e 's/a~/¥&auml;/g' inputfile > outputfile
```

（“&” という特殊記号の前にはエスケープのための “¥” をつけてやる必要がある。）としてやると、TEXAS ファイル (inputfile) のなかの “a~” をすべて “&auml;” に変換したファイル (outputfile) を作ってくれる。

そこで、

```
s/a~/¥&auml;/g
```

```
s/u~/¥&uuml;/g
s/o~/¥&ouml;/g
s/s~/¥&szlig;/g
s/A~/¥&Auml;/g
s/U~/¥&Uuml;/g
s/O~/¥&Ouml;/g
s/e¥/¥&eacute;/g
s/e¥¥/¥&egrave;/g
s/a¥¥/¥&agrave;/g
s/u¥¥/¥&ugrave;/g
s/e^/¥&ecirc;/g
s/a^/¥&acirc;/g
s/o^/¥&ocirc;/g
s/u^/¥&ucirc;/g
s/e~/¥&euml;/g
s/i~/¥&iuml;/g
s/c~/¥&ccedil;/g
```

(8~11行目、"/" および "¥" という特殊記号の前にも同様に "¥" をつけてやる) というスクリプトを書いたファイル (tex-htm.sed とする) を作っておき、  
sed -f tex-htm.sed inputfile > outputfile

としてやると、TEXAS ファイル (inputfile) の独仏文字をすべて HTML の表記に変換した HTML ファイル (outputfile) を一挙に作ってくれる。前述のように、イタリックおよびゲシュペルト (私たちはボールドを代わりに使った) については機械的には行かないが、それにしても、私たちが昨年度 TEXAS ファイルを作成する副産物として HTML ファイルを容易に作成することができたのも、このようなテキストツールのおかげである。

さて、このようなテキストツールを使えば、異機種間での独仏文字その他の特殊文字の変換も可能となる。以下においては、たまたま私の手元にあったのが日本語版の SED であったがため、2 バイトコード用に割り当てられた部分についての変換がうまく行かないようなので、これまた私の手元にたまたまあった XTR というプログラムを使うことにした<sup>18)</sup>これも SED と同様、テキスト整形・加工・印刷といった、様々なテキスト処理のためのツールである。もともとスペイン語の文書を印刷することを目的として作られたものらしい

が、付加的機能として検索・置換の機能も持ち、欧文文字コードには強いようなので、これを使うことにした。基本的な用法を確認するために、先ほどと同じ変換をこのプログラムでしてみると、まず、

```
xtr -r/a ~/&auml; inputfile > output
```

で1文字の変換がテキスト全体にわたって行われ、

```
.r/a ~/&auml;/  
.r/u ~/&uuml;/  
.r/o ~/&ouml;/  
.r/s ~/&szlig;/  
.r/A ~/&Auml;/  
.r/U ~/&Uuml;/  
.r/O ~/&Ouml;/  
.r/e¥//&eacute;/  
.r/e¥¥/&egrave;/  
.r/a¥¥/&agrave;/  
.r/u¥¥/&ugrave;/  
.r/e ^/&ecirc;/  
.r/a ^/&acirc;/  
.r/o ^/&ocirc;/  
.r/u ^/&ucirc;/  
.r/e ~/&euml;/  
.r/i ~/&iuml;/  
.r/c ~/&ccedil;/
```

というスクリプトを書いたファイル (tex-htm.xtr) を作っておき、

```
xtr @tex-htm.xtr inputfile > outputfile
```

としてやると、同様にしてHTMLファイル (outputfile) ができる。

さて、そこで今度は、文字コードの変換に取りかかろう。まずは、DOSのコード・ページ437が使われているテキストをHTMLファイルにしてみよう。そこで、先に掲げた表1の文字コードを見ながら、例えば、“a”であれば縦“8-”と横“-4”の交差した地点“84”にあり、“u”であれば縦“8-”と横“-1”の交差した地点“81”にあり、等々、その後も同様にして(コード番号の前に“¥x”をつけて)、

```
.r/¥x84/&auml;/
```

```
.r/¥x81/&uuml;/
.r/¥x94/&ouml;/
.r/¥xE1/&szlig;/
.r/¥x8E/&Auml;/
.r/¥x9A/&Uuml;/
.r/¥x99/&Ouml;/
.r/¥x82/&eacute;/
.r/¥x8A/&egrave;/
.r/¥x85/&agrave;/
.r/¥x97/&ugrave;/
.r/¥x88/&ecirc;/
.r/¥x83/&acirc;/
.r/¥x93/&ocirc;/
.r/¥x96/&ucirc;/
.r/¥x89/&euml;/
.r/¥x8B/&iuml;/
.r/¥x87/&ccedil;/
```

b

```
.r/¥x0D¥x0A/<BR>¥x0D¥x0A/
```

(先程までは省略していたが、ここ最後の2行で、ついでに、DOSの改行にHTMLの改行マーク<BR>を付け加える作業も示しておく。DOSの改行はHTMLでは無視されるためである) というスクリプトのファイル (dos-htm.xtr とする) を作ってやり、これで先ほどと同様に、

```
xtr @dos-htm.xtr inputfile > outputfile
```

という XTR のコマンドにかけてやると、DOS/V のコード・ページ 437 で表記されていた独仏文字が HTML テキストに変換される。

次に、Mac のコード・ページが使われているテキストを HTML ファイルにしてみよう。上と同様にして、先に掲げた表 3 の文字コードを見ながら、

```
.r/¥x8A/&auml;/
.r/¥x9F/&uuml;/
.r/¥x9A/&ouml;/
.r/¥xA7/&szlig;/
.r/¥x80/&Auml;/
```

.r/¥x86/&Uuml;/  
.r/¥x85/&Ouml;/  
.r/¥x8E/&eacute;/  
.r/¥x83/&Eacute;/  
.r/¥x8F/&egrave;/  
.r/¥x88/&agrave;/  
.r/¥x9D/&ugrave;/  
.r/¥x90/&ecirc;/  
.r/¥x89/&acirc;/  
.r/¥x99/&ocirc;/  
.r/¥x9E/&ucirc;/  
.r/¥x95/&iuml;/  
.r/¥x8D/&ccedil;/  
.r/¥xA4/&#167;/

(最後の行は” ”を HTML のコードに変換するもの) というスクリプトのファイルを作ってやり、これで先ほどの XTR のコマンドにかけてやると、Mac の独仏文字を含むテキストが HTML のテキストに変換される、という次第である。

ここまで来たら、お望みならば、独仏文字のみならず、その他の特殊文字についても、DOS あるいは MAC から HTML へだけでなく、その逆も、また更に、DOS から MAC へ、あるいはその逆への変換も自由自在になる。これ以上ここに詳しく記すのは蛇足となろう。ご自分で試みられたい。

さて、こうして、98、Mac、DOS/V という異機種間の独仏文字の互換を確保することができるようになった。そして、その中で分かってきたことがある。すなわち、これら異機種間での互換は、前述のようなテキストツールを使えば可能であることは分かったが、そもそも HTML テキストにしてしまえば、機種の違いに関係なく、WWW ブラウザで見れば、同じテキストが同じように正しい独仏文字で表示されるということである。つまり、HTML で書かれたインターネット WWW 上の電子テキストにおいては、機種の違いなど気にすることなく、独仏文字を扱うことができるようになったということである。これは機種の違いによって閉じられていたマルチリンガル環境に穴を開け、風通しをよくしてくれるであろう。

ただし、この HTML テキストにも問題がないわけではない。まず、哲学のテ

&#32;	&#64;	@	&#96;	&#128;	•	&#160;	&#192;	A	&#224;	À		
&#33;	&#65;	A	&#97;	a	&#129;	™	&#161;	ı	&#193;	Á	&#225;	Á
&#34;	&#66;	B	&#98;	b	&#130;	ˆ	&#162;	€	&#194;	Â	&#226;	Â
&#35;	&#67;	C	&#99;	c	&#131;	f	&#163;	£	&#195;	Ã	&#227;	Ã
&#36;	&#68;	D	&#100;	d	&#132;	u	&#164;	¤	&#196;	Ä	&#228;	Ä
&#37;	&#69;	E	&#101;	e	&#133;	ˆ	&#165;	¥	&#197;	Å	&#229;	Å
&#38;	&#70;	F	&#102;	f	&#134;	ı	&#166;	ı	&#198;	Æ	&#230;	Æ
&#39;	&#71;	G	&#103;	g	&#135;	ı	&#167;	§	&#199;	Ç	&#231;	Ç
&#40;	&#72;	H	&#104;	h	&#136;	ˆ	&#168;	ˆ	&#200;	È	&#232;	È
&#41;	&#73;	I	&#105;	i	&#137;	‰	&#169;	©	&#201;	É	&#233;	É
&#42;	&#74;	J	&#106;	j	&#138;	ˆ	&#170;	ª	&#202;	Ê	&#234;	Ê
&#43;	&#75;	K	&#107;	k	&#139;	ˆ	&#171;	«	&#203;	Ë	&#235;	Ë
&#44;	&#76;	L	&#108;	l	&#140;	œ	&#172;	ˆ	&#204;	Ï	&#236;	Ï
&#45;	&#77;	M	&#109;	m	&#141;	ı	&#173;	ˆ	&#205;	İ	&#237;	İ
&#46;	&#78;	N	&#110;	n	&#142;	ı	&#174;	©	&#206;	Í	&#238;	Í
&#47;	&#79;	O	&#111;	o	&#143;	ˆ	&#175;	ˆ	&#207;	Ï	&#239;	Ï
&#48;	&#80;	P	&#112;	p	&#144;	Δ	&#176;	ˆ	&#208;	ˆ	&#240;	ˆ
&#49;	&#81;	Q	&#113;	q	&#145;	ˆ	&#177;	ˆ	&#209;	Ń	&#241;	Ń
&#50;	&#82;	R	&#114;	r	&#146;	ˆ	&#178;	ˆ	&#210;	Ō	&#242;	Ō
&#51;	&#83;	S	&#115;	s	&#147;	ˆ	&#179;	ˆ	&#211;	Ó	&#243;	Ó
&#52;	&#84;	T	&#116;	t	&#148;	ˆ	&#180;	ˆ	&#212;	Ô	&#244;	Ô
&#53;	&#85;	U	&#117;	u	&#149;	ˆ	&#181;	μ	&#213;	Õ	&#245;	Õ
&#54;	&#86;	V	&#118;	v	&#150;	ˆ	&#182;	ı	&#214;	Ö	&#246;	Ö
&#55;	&#87;	W	&#119;	w	&#151;	ˆ	&#183;	ˆ	&#215;	×	&#247;	×
&#56;	&#88;	X	&#120;	x	&#152;	ˆ	&#184;	ˆ	&#216;	Ø	&#248;	Ø
&#57;	&#89;	Y	&#121;	y	&#153;	™	&#185;	ı	&#217;	Ù	&#249;	Ù
&#58;	&#90;	Z	&#122;	z	&#154;	ˆ	&#186;	ˆ	&#218;	Ú	&#250;	Ú
&#59;	&#91;	[	&#123;	[	&#155;	ˆ	&#187;	ˆ	&#219;	Û	&#251;	Û
&#60;	&#92;	\	&#124;	\	&#156;	œ	&#188;	ˆ	&#220;	Ü	&#252;	Ü
&#61;	&#93;	]	&#125;	]	&#157;	ˆ	&#189;	Π	&#221;	ı	&#253;	ı
&#62;	&#94;	^	&#126;	^	&#158;	ı	&#190;	ˆ	&#222;	ñ	&#254;	ñ
&#63;	&#95;	_	&#127;	_	&#159;	ı	&#191;	ˆ	&#223;	ŋ	&#255;	ŋ

表 5 : ASCII コードによる特殊文字の表示



キストには、フッサールの場合に限らず、ドイツ語・フランス語のみならず、ギリシア語もしばしば出てくる。もう一度、表1のコード・ページ437にもどると、そこには、ギリシア語のアルファベット24(語末のシグマまで含めると25)文字、大文字も合わせて48(同49)文字のうち、13文字、ローマ字アルファベットがそのまま使えるものを含めても28文字しか入っていない。しかし、それはまだいい方で、表3をみていただくと、このWindows用コードでは、ギリシア語は、何故か残された唯一の例外(ミュー)を除いて、すべて捨てられてしまった。また、表4のMacintosh用コードでは、わずか5文字(ローマ字アルファベットがそのまま使えるものを含めても20文字)しか、入っていない。DOSであれば、ギリシア語図形文字セットであるコード・ページ869<sup>(19)</sup>と切り替えれば、すべてのギリシア文字が入っているが、そうすると今度は独仏文字が出なくなる。要するに、ギリシア語をドイツ語・フランス語と共存させることができないのである。(あとは、日本語用2バイトコードの特殊文字のなかに入っている全角のギリシア語を使うしかない。)このような事情は、HTMLにおいても何ら変わっていない。先には、独仏文字のHTMLとして"&auml;"といった表記を用いてきたが、同じことはASCIIコードを用いて表記することができる。ヨーロッパ系言語用のフォントに設定した場合の特殊文字の表示方法については、表5<sup>(20)</sup>をご覧ください。ほとんど前掲表3のWindow用コードが用いられている(まったく同じではない)。つまり、前述のように、そこにはギリシア語が、ここでもまた何故か残された3文字(ミュー以外に、パイの大文字・小文字)を例外として、ほとんど含まれていない。HTMLでギリシア語をすべて表記するためには、フォントをSymbol、エンコーディングをGreekにしてやらねばならないが、これはローマ文字アルファベットの場所(65から90、97から122)にギリシア語をあてるため、アルファベットがすべてギリシア語になってしまう。ここでもやはり、ギリシア語をドイツ語・フランス語と共存させることはできないのである。

さらに、日本語との共存の問題もある。前述のように、ヨーロッパ系の言語では独仏文字が当てられているコード表の128から256に、日本語では半角カタカナと2バイトコード1文字(いわゆる全角文字)の1バイト目を当てている。そのため、コード・ページ437においてドイツ語・フランス語は英語と共存できるし、コード・ページ932において日本語は英語と共存できるが、問題は、ドイツ語・フランス語と日本語の共存ができないことである<sup>(21)</sup>この点は、DOS、Mac、Windowsいずれのコード・ページでも同じだったが、HTMLで

も変わりはない。確かに、フォントとエンコーディングの切り替えさえすれば、一つの文字コードに共存できない複数の言語を表示することができるのだが、それらが一つの画面で共存ができないようであれば、これをマルチリンガルと呼ぶことはまだできないだろう<sup>(22)</sup>

もっと根本的な問題を言えば、たとえインターネットを通じてさまざまな電子テキストを入手できるとしても、私たちの関心は、画面上でテキストが読めるなどというところにあるのではない。むしろ、さまざまな仕方で検索をすることができるか、私たちが TEXAS を使って行っているような検索ができるか、さらにできれば、文章解析のようなことまでできるか、というところにある。その点では、WWW ブラウザはあくまでも「ブラウズ」するためだけのものにすぎない。いま求められているのは、利用者自身が WWW 上でせめて TEXAS なみの検索作業を可能にするような CGI (Common Gateway Interface) の開発と、それを利用できる環境の整備<sup>(23)</sup>であろう。今後に期待したい。

## おわりに

さて、インターネットに話を戻そう。パソコンとインターネットに対する、私の基本的なスタンスは、ツールとして役に立つようであれば利用したいということに尽きており、これらのツールが万能だと思っているわけでもなければ、ツールを使うことがそのまま哲学になると思っているわけでもない。冒頭に挙げたストーンの言い方で言えば、インターネットが「何かに近づく自由」を与えてくれるなら、それだけで大歓迎。同じ関心をもった研究者が共有財産として共有していいような情報に誰でも近づくことができる。インターネットはそれを可能にしてくれるのである。そういうスタンスにいる限り、「何かから遠ざかる自由」は、言うなれば初めからもっている。「何かから遠ざかる自由」などと言い出すのは、それこそインターネット中毒になっているネットサーファーだけであろう。インターネットはもともと、研究者達がお互いの情報を交換しあうために構築されたものであった。それが商業ネットと接続されることによって、大衆化されるとともに、金儲けの道具にすらなっている。そこには、「ゴミの山」と呼ばれても仕方がないようなものも少なくなかろう。しかし、そのような弊害があるからといって、せっかく手に入れた、情報の民主主義を可能にしてくれる手段を研究者が手放してはならないであろう。

ちなみに、私たちが構築・運営しているフッサール・データベースには、こ

の半年の間にも多くのアクセスがあった。残念ながら、ホームページにはカウンターをつけていないし、ホームページへのアクセスのログも確認していないが、少なくともホームページからデータベースそのものへ入っていき、ftpを使ってデータそのものをダウンロードして行ったものについてはログを保存しているので確認できる。それによれば、昨年4月にホームページを開設し、半年間はログを取っていないが、昨年10月27日から取り始めて、今年3月15日までで延べ数が532件あった。国別で言えば、日本が264件、アメリカが53件、ドイツが40件、フィンランドが23件、イギリスが11件、デンマークが11件、チェコが8件、ノルウェーが7件、カナダとオランダが5件、ハンガリーが4件、ギリシアが3件、ベルギーとポーランドが2件、オーストラリアとスペインが1件、その他DNS (Domain Name Server) に登録されていない(したがって、国が分からない)ものが88件、という具合で、私たちのフッサール・データベースがいかに国際的に利用されているかが分かる<sup>(2)</sup>このようにフッサール研究のための基盤を提供することによって、日本におけるフッサール研究全体の水準を上げること、国際的なフッサール研究に貢献すること、それが私たちの当面の目標である。

最後にもう一つ耳寄りな情報をつけ加えておこう。昨年以來、私たちの共同研究者でもある和田渡氏が編集の労をとり、日本におけるフッサール研究に関わるこれまでの論文を網羅した膨大な文献目録が作成され、まもなくフッサール・データベースのホームページにリンクされて公開される計画である。小論が活字になるころには、すでに完成していることであろう。改めて、私たちのホームページにアクセスしてみられることをお勧めする次第である。

注

- (1) クリフォード・ストール『インターネットはからっぽの洞窟』(倉骨彰訳、草思社、1997年)
- (2) 同上『カッコウはコンピュータに卵を産む』(池央耿訳、草思社)
- (3) 立花隆『インターネット探検』(講談社、1996年)
- (4) 「どこでもドア」は社会主義国の壁にも穴を開けた。ベルリンの壁が崩壊したのと同じ1989年に天安門事件のあった中国でも、8年経った現在ではインターネットが一般公開されている。「窓を開ければ、数匹のハエは飛び込んでくる。ハエが入ってきたからといって窓は閉められない」という、北京市電信管理局副総技師の言葉(朝日新聞、1997年5月13日朝刊)

の「奔流中国」参照)は、現代中国のインターネットに対する姿勢を象徴している。

(5) 拙稿「インターネットによって入手可能な哲学関係の情報源について」(情報知識学会ニューズレター39、1996年)を参照。

(6) 拙稿「フッサール・データベースについて」(人文論集、第46号の1、1995年)、および、同「インターネットを利用した哲学研究のためにフッサール・データベースの新段階」(人文論集、第47号の1、1996年)を参照。

(7) 全集本巻の残りの巻については、あと3年間で完成する予定であるが、できれば、補充のDokumenteとして既に刊行されているの *Husserl-Chronik*、Eugen Fink に託された *VI. Cartesianische Meditationen*、そして、全10巻で1994年に刊行された *Briefwechsel* にまで作業を継続したいと考えている。

(8) このテーマの背景については、拙論「見えないものの現象学のために」(1996年3月25日、京都大学における現代哲学研究会にて口頭発表、近いうちに活字にする予定)を参照。また、問題の広がりについては、拙稿「時間・他者・身体—フッサールの反デカルト的省察」(中部哲学会紀要、第29号、1997)も参照されたい。

(9) 前掲拙稿「フッサール・データベースについて」でも述べたように、私たちは、現在のところ、テキストデータベース検索プログラムとして TEXAS (清水明氏作)を利用している。

(10) 城岡啓二「テキストファイル版ドイツ語逆引き辞典の作成とその利用」(人文論集、第47号の1、1996年)によると、日本独文学会データベース委員会では、「ドイツ語特殊文字は、¥記号を当該文字の直前に付加する[例: ¥A; ¥a; ¥s; ¥O; ¥o; ¥U; ¥u]」というエスケープに¥記号を使う2文字方式を採用しているようである。いずれの方式でも、要するに、テキストそのものの中にはふつうなら出てこないような記号の組み合わせを使って特殊文字を表記するものであり(後述のHTMLも、その点では同じと言える)、それゆえまた、一括変換を使えば相互に互換性を保つことは可能なので、どちらの方式を採用するかは大した問題ではない、と言える。ついでに言えば、同氏の論考は、私とはまったく異なる関心においてであるが、小論で後に触れる sed というプログラムを(awk などとともに)使ったものであり、参考にさせていただいた。

(11) 例えば、電視郎『ホームページのつくり方』(エーアイ出版、1996年)

(12) あるいは、印刷業界などですでに標準になってきており、情報知識学会でも盛んに取り上げられている SGML (Standard Generalized Markup Language) のほうが、将来的には主流になるのかも知れないが、これについては私自身まだ勉強不足である。SGMLについては、例えば、Martin Bryan『SGML入門』(アスキー出版局、1991年)などを参照。また、文書管理に優れた SGML、閲覧性に優れた HTML、印刷のための TEX については、松井陽子「HTML、SGML、TEX の比較」(オープンデザイン、NO.13、1996年)を参照。

- (13) これについては、前掲拙稿「インターネットによって入手可能な哲学関係の情報源について」を参照。また、この拙稿は、インターネット (<http://jcmac2.hss.shizuoka.ac.jp/shakai/ningen/hamauzu/on-int1.html>) でも公開されているので、そこから容易に電子テキストのある世界中のサイトに跳ぶことができる。
- (14) 同じ苦勞を誰もが必要はない、後から同じような作業をしようとする人には、私のような苦勞をせずとも、私を踏み越えて行っていただければいい、と思うからである。以下に記すことは、知る人ぞ知るで、知っている人には今さらということかも知れないが、昨年までの私を含め知らない人も多く、そして、こんなことは誰でも知っている、ということであっているもの、「情報についての民主主義」が買かれていいものと私には思われるので、あえてここに報告する次第である。
- (15) 池田巧「Macintosh によるマルチリンガル環境の構築」(三上吉彦ほか編著『電脳外国語大学』技術評論社、1993年)を参照。
- (16) 表は三つとも、三上吉彦ほか編著『パソコン外国語製品ガイド'95』(インターナショナル・トムソン・パブリッシング・ジャパン、1995年)229、235、237、238頁より。
- (17) SEDについては、例えば、Dale Dougherty『sed & awk プログラミング』(アスキー出版局、1991年)を参照。
- (18) これは、村上真雄氏作のフリーソフトウェアである(『月刊アスキー』1992年6月号の付録ディスクに収録されていたが、パソコン通信を通じてダウンロードすることもできるようである)。なお、前記の SED およびこの XTR とともに、同僚の吉田栄人氏(文化人類学)からご教示いただいた。本当は、ここに紹介したものよりはるかに高度な、正規表現を駆使した用法について詳しくご教示いただいたのだが、ここではそれについて立ち入る余裕がないのが残念である。感謝するとともに、同氏が運営する「グレミオ・ホームページ(ラテンアメリカの民族と宗教)」(<http://www.ipcs.shizuoka.ac.jp/~jssyosi/index-j.htm>)を紹介しておきたい。しかし、これらのプログラムの紹介について誤りがあるとしたら、すべて責任は私にあることは言うまでもない。
- (19) 前掲『パソコン外国語製品ガイド'95』234頁を参照。
- (20) 笹木望ほか共著『HTML&CGI入門』(エーアイ出版、1996年)51頁より。
- (21) ここにも、パソコンとインターネットの世界では、英語が世界各国の言語の共通の基盤とされている、という「英語帝国主義」を嗅ぎつけるべきであらうか。もちろん、或るワープロの環境内であれば、日本語とドイツ語・フランス語・ギリシア語を共存させることは不可能ではないが、それは同じ環境内だけで実現できることであって、汎用性は持たないことは言うまでもない。
- (22) 石川伊織「フル・テキスト・データベースにおける多言語処理の可能性と不可能性」(情

報知識学会ニューズレター34、1995年)は、DOS/V・Windows環境における同じ問題点を指摘している。

(23) わが静岡大学では、ネットワークのセキュリティの問題から、現在のところ、CGIを自由に使える環境にはない。

(24) 私の目についた限りでも、昨年の時点で既に、ドイツ・ハイデルベルク大学の Dieter Koehler による Philosophie-Seiten [<http://ix.urz.uni-heidelberg.de/~dkoehler/philosophie/ihvz.htm>]、アメリカ・コロラド大学の Bob Sandmeyer による The Husserl Page [<http://www.mesa.colorado.edu/~bobsand/husserl.html>]、スイス・ジュネーブ大学の Pierre Perroud による ATHENA: BOOKS, LITERATURE, ARTS, SCIENCE, MINERALOGY [<http://un2sg1.unige.ch/www/athena/html/athome.html>]、香港中文大学・文學院・人文科学研究所による Research Institute for the Humanities (RIH) (Faculty of Arts, The Chinese University of Hong Kong) [<http://www.arts.cuhk.hk/Philo.html>] などに、私たちのフッサール・データベースのホームページへのリンクが張られていた。